

オジロビタキ (紅胸姫鶉 *Ficedula parva*)¹,
 イイジマムシクイ (艾吉柳鶯 *Phylloscopus ijimae*).
 中国大陸における分布の可能性

劉陽・Paul Holt・陸維
 訳福井和二

中国大陸の探鳥活動はますます盛ん、発展の勢いにあり、とくに最近、数種の中国における新記録が発見された。2005年から2006年の間、ほかでもなく、ホオジロヒヨドリ (白頬鶉 *Pycnonotus leucogenys*) (張高峰等, 2006), ルリゴシインコ (藍腰短尾鸚鵡 *Psittinus cyanurus*) (林劍声等, 2005), セグロアマツバメ (暗背雨燕 *Apus acuticauda*) (雷進宇, 劉陽, 2006), ヒュームノドジロムシクイ (休氏白喉林鶯 *Sylvia althaea*) (Holt P. in prep.), ヨーロッパムナグロ (欧金鶉 *Pluvialis apricaria*) (Holt P. in litt. to Liu Yang), スキハシコウ (鉗嘴鶉 *Anastomus oscitans*) (王亦天, 2006) 等の6種の鳥類が相継ぎ中国の域内で初めて記録され、しかも、これらの発見にはバードウォッチャーの貢献が大きい。劉陽 (2006) は中国大陸および領海に隠れた鳥種が分布し、その内の少しばかりが実証され、あるいは捕獲されて、調べられているのではないかと、推測している。これら潜在的に分布している種のうち、通常見られる種と形態的によく似ており、野外において識別が困難で、観察者が見落とす可能性がある種もある。オジロビタキ (*Ficedula parva*) とイイジマムシクイ (*Phylloscopus ijimae*) もそうした例である。したがって、筆者が本文において、中国大陸に生息する可能性のあるこの2種について、分布、分類、識別を紹介して、バードウォッチャーの今後の観察に注意を促したい。

オジロビタキ

野外識別

体長は11cmのキビタキ属、体型は大型のムシクイほどで、オジロビタキ (紅喉姫鶉 *F. albicilla*)² より小さい (実際3~5g軽い)。紅胸姫鶉の成鳥は喉の橙赤色が前胸部まで達し (喉の橙赤色は加齢に従い大きくなる)、一見ヨーロッパコマドリ (欧亜鶉 *Erithacus rubecula*) のように見える。顔と前額が灰色。後者は喉がわずかに橙赤色、前胸部は灰色を帯びており、顔の灰色は頬に及んでいる。これは野外において明らかに識別できる。その他、紅胸姫鶉の下嘴の色が浅く、オジロビタキ (紅喉姫鶉) の下嘴は色が深い。ただ、この特徴は野外での観察では識別が難しく、標識調査などの場において雌、幼鳥等の識別の主要な手段となっている。鳴き声は両者の識別に充分役立つ方法だが、典型的な囀り以外、渡りの時期などは識別は難しい。両者は単調な“trrrt”という鳴き声で、区別が難しい。

分類

オジロビタキ (紅喉姫鶉 *F. parva*) は下の普通亜種 *parva* で (Clements, 2000), これと東方の亜種 *albicilla* は形態と鳴き声の上で大きく異なり、独立の種とされる (Svensson, 1992 及び Alström P. in litt. to Yang Liu). 李偉と張雁雲 (2004) ミトコンドリアDNAの細胞色素b遺伝子型全序列の結果をもって、両種間の遺伝的距離を測定したところ、遺伝的距離は6.4%と、異なる両亜種間の差 (0.1~0.2%) より遠く、これをもって二つの亜種は“分割”すべきと提唱した。しかし、出版されたばかりの世界鳥類ハンドブック (第11巻) の、作者は *parva* と *albicilla* がロシアシベリア地区に交雑地域があることを理由に、従来通り亜種として処理している (Del Hoyo

et al., 2006). このとおりであるが, *albicilla* の分類を一個の独立種として, 今後中国の記録をなお検討, 考慮する価値がある.

訳注

- *1 オジロビタキ (紅胸姫鶉 *Ficedula parva*); *Ficedula parva* は中国名は紅喉姫鶉で, 和名はオジロビタキとなっている. (山階鳥類研究所版「世界の鳥の和名」)
- *2 紅喉姫鶉 (*F. albicilla*); *1 との混同があるようで, 本種を独立種とするについて様々な意見があるので, 本文に従い, 両種を中国名で記載することとした.

分布

紅胸姫鶉の繁殖はヨーロッパ大陸で, 東はウラル山脈, コーカサス, イラン北部, ヒマラヤ山脈西部である. アジアでの越冬は印度北部 (Svensson, 1992) である. 渡りの期間と越冬期には中国の新疆省西部, チベット南部に出現する可能性がある. 2003年4月および2004年11月韓国において野外記録があり (参考 <http://www.birdskorea.org/albicilla.asp>), わずかな紅喉姫鶉の幼鳥が渡りの時期に迷鳥として中国東部に出現する可能性がある.

イイジマムシクイ

野外識別

イイジマムシクイは長く頑丈な嘴をしており, 上嘴は色濃く, 下嘴はオレンジ色である. 頭部から後頸までオリーブ緑色であるが, 灰色を帯びており, 頭頂の色に比較して, 背部は緑色がつよい. 眼瞼の下半分は黄色で, 上半分と別れている. 眉斑は肌色を帯びた黄色で, 細長く眼の後方まで伸び, “跳ね上がる” 感じだがやや不明確. 風切羽を折り畳んだとき羽縁のオリーブ緑色が見え, ごく淡い翼斑となり, 中雨覆はわずかに黒褐色を帯び, 尾羽は緑色で, 外側の尾羽は純白である. 体下面および脇は灰色を帯び, 下尾筒は明瞭な黄色, 脚は薄い色 (Thomas, 2001). メボソムシクイ (極北柳鶯 *phylloscopus borealis*) との識別は下嘴の色が浅く, 暗色の斑がない, 頭頂が灰色. センダイムシクイ (冕柳鶯 *phylloscopus coronatus*) との識別は頭中央線がなく, 全体に灰色がかかっている. 鳴き声も渡りの期間の最も有効で信頼できる識別方法で, 連続して清らかな鳴き声は “swee-swee-swee-swee” と鳴き, リズムはメボソムシクイを連想させる, しかし, 後者は “dzik” と一声で鳴きあるいは連続して金属的な声で “twee” および軽く柔らかい声で “phi-phi” と鳴く. 鳴き声については <http://nikonf.hp.infoseek.co.jp/f6hs.html> を参照されたい.

分類

イイジマムシクイは 1892年, ノルウェーの鳥類学者 Leonhard Hess Stejneger (1851-1943) が日本の伊豆諸島三宅島で標本を採集した. 鳴き声などの比較からカシミール地域のニシセンダイムシクイ (大冕柳鶯 *P. occipitalis*) と似ている. かつて, センダイムシクイ (冕柳鶯 *phylloscopus coronatus*) の下に置かれた (del Hoyo et al., 2006). しかし, 繁殖生態, 鳴き声および DNA 解析等により独立種とされた (Thomas, 2004, Saito et al., 2005, del Hoyo et al., 2006).

分布

イイジマムシクイは日本本土から遠く離れた伊豆七島および琉球列島北部のトカラ列島で繁殖する. イイジマムシクイは全世界において数千羽といわれ, その越冬地域は確定していない (Birb Life International, 2006). 一般的にフィリッピン, 台湾で越冬すると推測されているが

記録はきわめて少ない (Hol Hoyo et al. 2006). 1947年12月15日、ヒリッピン¹のルソン島で採集された3つがいのうち、5羽の標本がアメリカ自然歴史博物館にあり、最近、台湾における2体の標本、記録があり、1924年12月埔里の1対が日本の山階鳥類研究所に現存し、1960年3月花蓮における標本がアメリカ自然歴史博物館 (Bird Lif International, 2006) に現存する。2005年12月30日、英国のバードウォッチャー Fergus Crystak が台湾墾丁の高士仏山で1羽の鳴き声を聞いている。2006年3月末 Fergus Crystal は宜蘭の蘇澳付近で3羽を記録し、台北県野柳付近で明確な映像が記録されている (丁宗蘇・劉陽私信)。台湾では、野外識別に熟練した人が識別し、信用できる記録が集まった。

繁殖地と越冬地の喪失によってイイジマムシクイはバードライフインターナショナルによって危急種とされ、また、“渡り鳥保護条約 (CMS)” 付録 II にランクされている (Birdlife International, 2006)。春秋の渡りの期間に、中国東南沿海部の福建、浙江では観察・記録の機会がある。イイジマムシクイは採食時には常に単独あるいは小群で樹冠部に多く行動し、他のムシクイ類との混群中でも見られる、バードウォッチャーの識別には形態と鳴き声である。この他、各地の標本室によって採集されたセンダイムシクイやメボソムシクイの標本と照合すると、意外的な収獲をもたらすことがある。

備考

Phylloscopus ijimae の中国名は《世界鳥類分布与分類名録》の“艾氏柳鶯”による (鄭光美, 2002)。しかし、艾氏柳鶯の言葉をつけたのは“ijimae”なる産地の表明で、発見者の氏名ではなく、“何某氏”とするのは適当ではない。もう一つの名称“艾吉”は実際に“ijima”の音訳で、字面から理解することはできない。“ijimae”を正確に中国文に訳すなら“飯島”となる。古く中国文で“飯島柳鶯”としたものもあり、筆者はこのような規範名称の処理に学名、英名、中国名の3者が一致するように使用しなければならないと考える。もうすぐ出版されるであろう“台湾鳥類名録”と“台湾鳥類志”において *phylloscopus ijimae* の中国名を“飯島柳鶯”とするとのことである (丁宗蘇より劉陽への私信)。英名によると“Jjima's Leaf Warbler”の他“Izu Leaf Warble”とも記されている、もし採用するならば“伊豆柳鶯”の中国語訳名も多くの人がとが親しみを感じるのではないか (注；日本人作家川端康成の小説《伊豆の踊り子》による)。このほかセンダイムシクイ (暁柳鶯) と同近縁関係にあり、しかも繁殖地が日本の島嶼であることから“日本暁柳鶯”とすることも一つの選択ではないか。